緑のふるさと協力隊活動報告（文／五島学）

# 鮫川にやってきて

緑のふるさと協力隊として昨年４月に鮫川村にやってきた五島学さん。３月13日、無事１年間の任務を終え、村を旅立ちました。

広報さめがわでは、毎月「だっぱい」と題して、鮫川村での体験記をお伝えしてきましたが、今回、１年間の活動をまとめた報告書が完成しましたのでご紹介します。彼が肌で感じた鮫川村とはどうだったのでしょうか？

## 協力隊に参加するまでの経緯

協力隊に私が応募したのは、新潟県のある農村で数日お世話になったことがきっかけでした。そこでお世話になった集落は、限界集落であり住民の大部分が高齢者でした。田舎で暮らしたことがない私にとっては、そこでの生活はとても魅力的で、驚きの連続でした。

日本にこんな魅力的な場所があったのか。そして、そうした場所がなくなろうとしている。農村に住んでみたいという思いと、こうした現状をなんとかできないかという思いから協力隊への参加を決意しました。

## 鮫川村の第一印象

鮫川に初めて足を踏み入れたとき、坂道とカーブの多さに驚きましたが、私がイメージしていたのどかな田舎の原風景も同時にありました。道沿いに続く田んぼや畑、牛の鳴き声が聞こえてくる牛舎。しかし、田んぼのことも畑のことも牛のことも何も知らない私には、ただの田舎風景としてしか、この時みえていませんでした。

## 鮫川村での生活

鮫川村で生活を始めてから食べ物に困ることはほとんどありませんでした。お米や野菜をいただき、お酒の席にも招待していただきました。心から皆さんに感謝をしています。また時間が過ぎるにつれ村の方とも顔見知りになっていき、立ち話しをすることも多くなりました。

埼玉に住んでいたとき、向かいの家にいる人ともほとんど話したことがなかったことが嘘のように思えます。人が少なければ関係も深くなる。人口を増やすことが市町村を良くするという私の勝手なイメージがこの一年間で一掃されました。

## 財産をたくさん持っている村民

昔から家の中で伝えられてきた漬物などをいただくとき、何世代も前の味が残っていることに感動しました。また何世代も受け継がれてきた畑や田んぼにおいても変わらず残っており、食べ物を作って生きていくことができる。当たり前のことですが、私のような都会人が持っていないものです。

そして、もう一つ大きな財産が山です。山に生えてくる山菜やきのこ、その他多くの使い道を持つ木々。炭を使ったこたつで暖をとる家も残っていました。決して減ることのない素晴らしい財産を持っている人が鮫川にはたくさんいることに気付いた一年でした。

## 季節とともに歩む

自然が生活のリズムを作る。季節とともに歩んだ一年間の思い出を紹介していきます。

### 春　田んぼ

鮫川にやってきて、まず冬だと感じました。木には葉もほとんどなく、いつになったら春になるのか？よく人に聞いていたことを覚えています。

五月に近づくにつれ桜も咲き始め、約一か月、春の訪れに差があることに、東北にきたという実感を持ちました。暖かくなると田んぼへ行くことが多くなりました。田植え靴を履いてバイクに乗り、いざ田んぼへ！実は鮫川にきて、初めて田んぼに入りました。

田んぼには、童心をくすぐるような楽しみがあります。しかし、少し時間が経つと足腰にどっと疲労感が出てきます。田んぼを甘く見ていました。しかし、田んぼを出て草の上に座って、いっぷく。いつの間にか心地よい疲労に感じてしまうのは私だけでしょうか。

### 畑

野菜づくりに挑戦しました。目指せ三十種類でしたが、その道のりは長く、最終的には食べた野菜が三十種類になりましたが、自分では達成することができませんでした。これからも継続して三十種類を目指し、いつか百種類作りたいと考えています。

土をいじるのは初めて、畝上げすることも鍬の使い方も知らない私が、畑を借りて野菜を作ることができたのは、多くの人の助けがあったからだと思います。また、鬼越・辺栗集落の近くに畑を借りて、トウモロコシ栽培にも挑戦しました。もちろん経験が全くないので、悪戦苦闘。獣害で収穫できないという予想に反して、収穫を上げることができたのは、きっと皆さんの心配が動物にも届いたからなのでしょうか。

畑は私に、朝起きて畑仕事をすることの気持ち良さを教えてくれました。また畑に向かう途中に声をかけていただいたことや、作業をしているときに野菜をいただいたこと。心配して様子を見に来てくれた方など、畑を作ったことでたくさんの人と知り合うことができました。本当にお世話になりました。そして、何よりトウモロコシをおいしいと言って食べてもらえたことが、農業が好きになる大きなきっかけとなりました。

大豆栽培

### 夏　自然

夏が近づくと、蛍が飛びます。とは言っても昨年は蛍が少ないということもあり、夜村の中を回っても、二、三匹しか飛んでいないことが多く、少しがっかりしていました。しかし、ある夜、お世話になっている農家さんと蛍を見に行ったところ、今日も駄目かと思いながらも少し道からはずれたところに入ってみると、周りが明るくなる程の神秘的な明かりが一面に広がっていました。自然が残っている鮫川。昼と夜、自然は見方によって全く違う顔をすることに気付きました。

### 雑草

夏は、雑草が伸びます。雑草の生命力には頭が下がります。バイクに草刈り機をつけて走っている姿をみかけた方もいるかと思います。しかし、雑草は草刈り機だけではキレイにならない。手で抜いてこそ雑草です。畑に行くと毎朝がっかりするほどの雑草。しかし、その分作物も伸びていると考えると抜き甲斐もあります。

確かに除草剤を使えばそれまでかもしれません。しかし、自分の口の中に入ると考えるとそう簡単に使うわけにはいきません。鮫川の人は、除草剤を使うのではなく、その分手間をかけて農薬をなるべく少なくする。簡単にはできないことを当たり前に言って努力している農家さんには本当に頭が下がります。

### 山奥

稲から穂が出始めた頃。役場の仕事として、山の奥深くに切り開かれた田んぼや、畑を見に行く機会がありました。軽トラックで入っていくのも難しい道の先に、穂を垂らしている稲がある。そういった情景を見るたびにかつての機械がなかった時代の人々の苦労、そして現在も耕作を続けている人の努力に感動しました。

初めてのカルチ作業

暑い中、重い荷物や肥料を背負って畑に通い。陽の出前から働き、陽の入り後も働いていたという先人の話を聞くたび、自分ももっと働かないといけないと思い返しました。

### 秋　伝統行事

鮫川村の西野地区に残っている伝統行事である熊野神社奉納相撲に参加させていただきました。大人になってから相撲をとったことがなかったため、少しびくびくしながら本番の日を待っていました。そして、本番。小さな相撲大会だと思っていたら大間違い、あまりにも立派な土俵と柱。そして、神社の

森の中に土俵があるという神秘的な情景に私は呑まれてしまいました。

こうした行事が今もなお地域の大切な行事として残り、そこに住む人たちの楽しみになっている。秋になれば相撲が地域の話題になる。そんな伝統行事が残っていることの素晴らしさを感じました。

## 収穫

収穫の秋という言葉がこれまであまりイメージできませんでした。それもそのはず、収穫した経験がないのです。でも今回農業に関わり、本当に秋は、米、野菜、果物と作物が溢れていました。山にはきのこも出ています。

しかし、種を蒔くときはよかったものこんなにも収穫が大変ということを知らず。作りすぎてしまったという面がありました。収穫の手間を考えて種を蒔かなくてはいけないということを思い知らされました。でもなんだかんだ言っても収穫の喜びは忘れられません。

大豆集荷作業

## 冬　景色

恐いもの見たさという面もあって、冬の訪れを待ち通しにしていた私。鮫川の冬を少し甘く見ていました。ここ数年の内でとても寒く、雪も多かった今年。私の家の洗濯物が朝起きるとかちかちに凍っていたことは、テレビなどで見る分にはおもしろいけれど、実際に経験してみるとあまり笑うことはできないと感じました。

そうは言っても良いところもあります。霜で真っ白になっている景色。朝起きて外に出るたびに心が洗われていました。また夜の一面に広がる星の輝きは、私がこれまで見たどんな星よりも輝いて見えました。

## 当たり前

鮫川にやってきて、多くの当たり前だったことが当たり前でなくなりました。たくあんは家で作るものだということ、炭こたつということたつがあること、地面が凍ってしまうことなどなど、あげ続けたらキリがありません。当たり前のことが当たり前でなくなるということで、私の価値観が大きく変化しました。田舎に住む人が当たり前にやっていることが、都会人から見るとすごいことに見えてしまうことを感じました。

味噌仕込み

## 豆で達者な村づくり　手まめ館

実は、私自身「手まめ館」に出会うまで、直売所のような場所に興味を示したことはありませんでした。若者には関係なく、おじいさん・おばあさんが行く場所と決めつけていた感があります。しかし、手まめ館には私の興味をそそる多くのことが秘められていました。

## 顔

作っている人の顔が見えないものを食べるのが当たり前の世の中。確かにスーパーへ行けば、「○○さんが作った」と書かれている野菜をみかけることが多くなりました。といっても「○○さんて、どういう人？」と購入した人に聞いてもきっと答えることはできないはずです。確かに手まめ館も村外から買い物に来た人にとっては同じかもしれません。しかし、鮫川村はお世辞にも大きな村とは言えない代わりに、村内に住んでいる人であれば、どこにどんな人が住んでいるか、自分が知らなくとも、周りにいる人に聞いてみればきっとわかってしまう村です。

ユースカレッジで火おこしに挑戦

それに一度位何かの機会に出会っているかもしれません。

生産者の顔が直接でないにしても、すぐ近くに見えるというのはとても大きなことです。それは、買って食べる人も、作って食べてもらう人にとっても本当に大事なことだと私は思います。「顔がみえる直売所」それが手まめ館です。

## 大豆

皆さんもご存知のように「まめで達者な村づくり事業」が現在も行われています。高齢者に大豆を栽培していただき、村で収穫した大豆を全量買い上げ、手まめ館で加工し販売するという仕組み。この事業のおかげで私は、この一年間ほとんど村内産百パーセントの大豆を食べて生活していました。味噌や豆腐、納豆まで、日本人の食生活に欠かすことができない大豆。しかしながら、輸入に頼るしかないという現状。そうしたジレンマを乗り越える力が鮫川村にあることはとても素晴らしいことではないでしょうか。そうしたくともできないという人が全国にきっとたくさんいるはずです。

私の考えとしては、小麦も含めて村内で生産することができたならば、米・大豆・麦、そして肉類を村内産で賄うことができるようになる。これぞ本当の地産地消として全国に名を轟かせることになるのではと思っています。

## 食

昨今、中国の餃子問題を発端として、食の安全が叫ばれています。私自信、鮫川にいて、食に多く関わってきました。稲作や野菜の栽培、畜産などに関わる中で本当の食の安全とは何かを突き詰めて考えるようになりました。そして、見つけた答えは自分で作るのが一番という結論に達しました。もちろん皆が自分で作ることはできません。

農薬などをなるべく使わずに野菜を栽培するようになれば、そうした野菜を自分で作ることも地元で買うことのできない都会に住む人は手を挙げてそうした米や野菜を欲しがるようになるはずです。しかし、そこには深い関係作りが必要です。先ほども書いたようにどんな人が作ったかわからなければ、どんな野菜も同じになってしまいます。つまり農村と都市の交流を進めて関係を築いていくことがこれからの農業に必要なことではないでしょうか。

## 終わりに　課題

鮫川で一年間生活する中で、一つの課題を発見しました。それは、鮫川村の将来を担う二十代、三十代の方々に対するものです。交流をしていく中で、若い力を多々感じる場面がありました。商工会青年部の方々が中心となって行った花火大会や西野地区における、お祭りなど、若者が活躍する場面に出会いました。しかし、どうしても参加している人の絶対的な数が足りないように感じます。減っているとはいえ、村にはもっとたくさんの若者がいます。村全体から若者の力が伝わってくる。鮫川がこれからどのようになっていくのか大きな鍵となるのではないでしょうか。

## これから

一年間、本当に鮫川にはお世話になりっぱなしでした。村を回れば、多くの人に声をかけていただくとともに、野菜をいただき、「広報読んでいるよ！頑張って」など、応援の声もいただきました。一年間私を村の中に入れていただき、育ててくれた鮫川村。この鮫川村に恩返しをすることが私にとって、将来ずっと続く大きな課題となりました。四月から鮫川を離れることになりましたが、福島県内で農業と、深く関わる仕事に就職することが決まりました。確かに今できることもほとんどありません、しかし、将来もっと成長して、もっと鮫川と関わっていくことができればと思っています。

皆さん一年間本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。